師匠のグッド・バイ

シー・ユー・アゲイン　後日談３

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18633143

R-18, モ腐サイコ100, エク霊, 霊幻総受け, 律霊

高級娼婦から足抜けしようとする師匠とそれを手助けする悪霊のエク霊の、後日談です。律霊のみ本番ありです。過度の嫉妬表現があります。お好きな方はよろしくお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

シー・ユー・アゲイン　後日談３

「恋人コースを頼んだからって、ベタベタしないでくださいよ」
開口一番そう言うと、霊幻さんはポカンとしていた。
「お、おお。分かった」
「それに、臭いですね。何か催淫効果のある香水付けてるでしょ。不快です」
マサが札束を緊張した面持ちで数えている車内で、僕は顔を顰める。
「そっか。匂い変えるわ」
霊幻さんはスーツの内ポケットからタバコケースを取り出す。
「ちょっと、勝手に吸わないでくださいよ」
「はは、悪い」
車内にミントの匂いが充満する。霊幻さんが吸ってるのはタバコではないようだ。なんだアレ。
「ちょっと見せてください」
「ん」
吸いかけを超能力でほぐし、中を確認する。……植物を乾燥させたもの？がほとんどか？お香みたいなものか。
「この匂いなら大丈夫か？」
「さっきよりはマシですね……おい、まだか」
ドン、と座席を蹴る。
びくりとマサが肩をすくませる。
「す、すみません影山先生……もう少しお待ちください、へへ……」
チッと舌打ちする。何年この仕事してんだよ。こういうところは霊幻さんを見習って欲しいものだ。
「律くん、座席は蹴っちゃダメだ」
霊幻さんがじっとこっちを見て注意してくる。
「うるさいな……」
「律くん」
「チッ！分かりましたよ、もうやりません！」

霊幻さんのこういうところ、本当にウザったい。いつまで保護者面するつもりだろうか。
「れ、霊幻さん、その、影山先生を、怒らせないでくださいよ……？」
「わぁーかってるよ、マサさん。アンタに悪いようにはしないよ」
親しげな２人にカチンとくる。この２人は仕事上付き合いは長い。
「……アンタらって、寝たことあるんですか？」
「律くん、それはマサさんに失礼だ」
「商品に手は出さないッス。それは運転手の鉄則ッス」
「ふうん。ま、どうでもいいけど」
イライラする。そんなに掘り下げて聞きたかった訳じゃない。
「で？今日はどこにつれてってくれるんです？ガッカリさせないでくださいよ」
「それなんだがな、律くん」
霊幻さんが僕の肩を……ごりっと触る。
「いっ！」
「この肩凝り、いつから放置してるんだ？」
「はぁ？あなたには関係ないでしょう」
「いや……こんな全身ガチガチに凝ったままでセックスしたら、下手したらギックリ腰になるぞ」
「はい！？あなたとセックスすると決まったわけじゃないでしょう！？！？」
「本番しないのか？まぁどっちでもいいが、とりあえずプール行くぞプール」
札束を数え終わったマサにエスコートされながら車を降りて、僕は強引に霊幻さんに駅前の会員制のジムに連れていかれる。
「ここ水着、貸してくれるから」
霊幻さんは自分の水着を置いているようだった。僕は紹介ということで今日は無料、と施設を紹介される。
……完全紹介制のセレブ向け施設だ。変な所にコネあるんだな、この人……。
「オリエンテーション終わった？俺もう着替えたから先にプールサイドの温泉入ってるな」

霊幻さんは白地に黒のラインが入った海パンに、薄い水色のラッシュガードを着ている。
「ラッシュガードなんて着るんですね」
「ああ、これ？ココなぁ、あまり肌見せてると良くないから……虫除けだ」
霊幻さんが苦笑する。どういうことだろうか。
プールに向かう霊幻さんを見送って、僕も貸し出された紺の海パンに着替える。まあ、これで肩凝りが取れるというなら、協力してやらんこともないし。
プールサイドに出て、理解した。
女性からの値踏みするような絡みつく視線。
「あの……」
「連れがいるので」
声をかけられそうになったのを、足早にかわす。霊幻さんとの合流を急ぐ。
露天風呂を模したプールサイドの休憩所で、霊幻さんは……知らない男に口説かれていた。
「ねぇ、面白い仕事してるんでしょ？お話しきかせて欲しいなあ。僕、力にもなれると思うし」
霊幻さんはちょっとした有名人だ。知ってる人は知っていて、いまだに声をかけてくる人がいる。……色んな意味で。
３０代ぐらいのその大柄な男は、無遠慮に霊幻さんの身体をジロジロと眺めまわしている。ラッシュガードを着ていても、生来の細さは隠せていない。すらっと伸びた足や、白くて細いうなじを這うような視線で見る男が、不快で。
「お待たせしました」
若干大きな声で言うと、男が僕を見て、あからさまに『勝った』という顔をして、本気で不快になった。
「良かったらそのお兄さんも入れて３人でお話ししようよ」
「それならいっそ２人で話したらいいんじゃないか？同じ弁護士同士、盛り上がると思うぞ」
ため息をつきながら霊幻さんが風呂から上がる。
「げっ」

同業者かよ……。相手の男も同じことを思ったらしい。
どうも僕は若くて舐められやすい。もう少し強面に生まれたかったものだ。
「じゃあな、お兄さん。霊障でお困りごとがあれば、うちへどうぞ」
男は未練たらしく霊幻さんのふくらはぎを目で追っている。諦めろよ。イライラするなぁ……。
「さて、律くん！まずは準備体操だ！」
霊幻さんが何事も無かったかのようにラジオ体操を始める。
「足を攣ったら大変だからな！しっかりやるんだぞ！」
「あ、あの……」
悪目立ちして恥ずかしくなってきた。女性たちも遠くに引いている。
「はいしんこきゅー！」
……ホントにこの人、いつまで僕らの保護者のつもりなんだろうか。
……たぶん死ぬまでだな。
僕はこの人のこういうところが、……案外嫌いではない。
「で、次はどうするんですか」
「足から水をかけて、ゆっくり入るんだ」
「はいはい」
スロープを使ってプールに入る。
「おおお、久しぶりの温水プールきもちいーな！」
そうですね。と思ったが、同意するメリットが感じられなかったのでしないでおいた。
「じゃあまず律くん、５分背浮きな」
ジャブジャブと奥のフリースペースに移動しながら霊幻さんが言う。
「最近泳いでないだろ？そんなにゴリゴリなのに突然動かしたら反動が来ちまう。まずはほぐしからだ。ほら、浮いて。できるか？」
「そりゃ、できますけど」
ぷか、と顔を上にして大の字に浮かぶ。
耳が水に沈んで変な感じだ。

「じゃあ、五分測るから」
５分か……長いな……。
「…律くん、もう少し力抜けるか？」
「はい？」
「身体に力入れすぎだ。手足は沈んでていい。……ほら、握って」
右手を握られてぎょっとする。逡巡して、そっと握り返した。
「もっと強く」
「……はい」
「もっと」
「！？は、はいっ」
「もっと力入れて！！」
「はいぎぎぎぎ」
「はい脱力！」
だらん、と。
右腕が軽くなった。
「全身やるぞ。はい左手」
んぎぎぎぎぎ……！
「はい脱力」
ぷらん。
「はい右足」
「はい左足」
「はい両肩」
ぷらぷらと。
水に浮かぶ。
……気持ちいい。
全身がじわじわと暖かくなってきて、意識が沈みそうになる。瞑想してるみたいだ。
水音と、プールの照明と、僕を見守っている、霊幻さん。
……こんな穏やかな時間、いつぶりだろう……。
「よし、そろそろ五分」
「あのっ！」
霊幻さんが僕をゆすったと同時に、若い女性２人組に声をかけられる。

「おふたりとも、テレビに出てたりしません？私たちも女優なんですよー！良ければこのあと一緒にご飯しませんか？」
そう言いながら霊幻さんを押し退けて僕の手を取る二人組。
……不快だ。
「あ、あのなお嬢さん方……」
「僕、ゲイなんで」
手を振り払う。
「いきましょう」
これ見よがしに霊幻さんと腕を組んで移動すると、恨めしそうな視線が霊幻さんを追っていた。
「お、おい、このジムにいる人たちはいつ客になるか分からないんだぞ？あまり邪険には……」
「うっとおしいんですよ、ああいうの。こちらの都合も考えずに」
「……ま、気のない時に話しかけられるウザったさは分かるよ。対応にも苦労するしな」
「あなたもナンパされるんですか？意外だな」
「うぐっ、……いやいつもはされねーよ？でも『仕事中』はなぁ、結構声かけられちまうんだよ……男から」
「……」
「『今晩オッケー』のサインを出してるから、仕方ないっちゃ仕方ないんだが、まいるよなぁ、アレ」
……実は。
霊幻さん、いつもと雰囲気違うなー、とは思っていた。
相談所にいる時とは違って、気だるげで。危うくて、隙だらけなのだ。
なるほど。それが裏の仕事中の顔ですか。
「さ、ついたぞ。次はここでクロール３往復な」
『ゆっくり水泳』コースだ。
「ゆっくり泳ぐこと！絶対に前の人を抜かさないこと。じゃ、いってらっしゃい」
身体がぽかぽかしてきていて、効果を感じている僕は素直に霊幻さんの言うことを聞く気になっていた。
……いや、気にはなっていたのだ、肩凝りは。忙しくて構ってられ

なかっただけで。
これでほぐれるなら、正直助かる。
コースを往復する。
ゴールで霊幻さんが待っていて、
バカップルよろしくタッチしようとしてきたので無視した。
「よーし、次は普通の速さで３往復な」
プールから上がると霊幻さんが知らないチャラ男に腰を抱かれてたので、チャラ男の足をうっかり踏みながらコースを変える。
次はゴールごとに霊幻さんとタッチすることにした。
いまいましい……。
「最後は思いっきり５０メートルクロールで泳いでこい。これで終わり」
力いっぱい泳ぐと。
メキメキぱきぱきと身体からしてはいけない音がする。
……今度から定期的に泳ぎにこよう……。
体育の授業が無くなると、本当に運動って足らなくなるんだな……。
このジム近いし、また霊幻さんに見て貰えば……いや別に一緒に来る必要は無いか。
プールから上がった僕は、２人して更衣室に向かう。
「お前晩飯予約してないよな？これから俺の事務所でマッサージするから、移動するぞ」
「こういうのって霊幻さんの方が予約してくれるのかと思って、してませんでしたよ？ああ、もちろんご馳走はしますけど」
「甘えるねぇー。ちょっと待ってろ」
首にタオルをかけて霊幻さんが電話をかけ始める。
髪から垂れたしずくが。
つうっ、と背中のくぼみを滑って落ちて。
僕は何となくそれを見てた。
「はいはい、予約取れましたよ、っと」
くるっと振り返った霊幻さんから思わずばっと目を逸らす。
「え、みてたの？スケベ」
「見てるわけないでしょう！？」

自意識過剰なんじゃないのか、この人！？
「ならいいけど、これから着替えるからちょっとあっち向いててくれる？」
「何か見られて困るものでもあるんですか？」
「……」
「……」
なんですか、その目は。
霊幻さんは小さくため息をついて海パンに手をかける。
僕もゴソゴソと服を着替えた。

※

「服、全部脱いで」
「セクハラで訴えますよ！？」
「事務所でするわけねーだろーが！？……お前ぐらい凝ってると、肩だけほぐしてもまず取れないからな。まずは全身からだ。ほら、脱いだらベッドにうつぶせになってくれ」
……だめだ、久しぶりに運動して、身体が程よくダルい。横になると眠りそう……。
「寝てていいぞ」
全身にホットタオルが乗せられる。
ふくらはぎから揉まれて、あえなく僕は意識を手放した。
こ、これは、疲れてたからで……。
霊幻さんのマッサージが気持ちよかったからでは、断じて、無いっ……。
……。
「――終わったぞ」
涼しい風が開いたドアから流れ込んできて、はっと目が覚める。
も、もうちょっと寝……。
「もう少し寝とくか？寝不足も溜まってんだろ、お前」
タオルを片付けながら霊幻さんが言うので、意地でも起きることにした。
「晩飯は時間に融通きくところを頼んである。ゆっくりしていい

ぞ」
意識のモヤが晴れたみたいだ。肩がスッキリしていて、身体が軽い。この人除霊とか言うよりも普通にマッサージ店開いた方が儲かるんじゃないか？
「……気怠いです」
「一気にほぐしたからなぁ。ほら、お水のんで」
ごくごくと冷たい水を流し込む。やたら美味く感じた。
「おしぼり置いとくから、身体拭いたら服着て出てこいよ」
霊幻さんが施術室から出ていくのを確認してから、あつあつのおしぼりを手に取って冷ましながら身体を拭く。
……悔しいが。
これだけ肩が軽いの、いつぶりだろうか。
「行きますよ」
「奢ってくれるって言うからちょっと高めの店にしたぜ？」
「本当に貴方は、抜け目のない……クレジット使える店でしょうね？」
また調味市から隣の市に移動する。
霊幻さんが選んでくれたのは、大きな窓がある完全個室タイプの創作居酒屋だった。
「他の人間の目が無い方が落ち着けるだろ？律くんイケメンだからすぐキャーキャー言われちゃうしな」
「……個室は嫌いじゃないですね」
正直、ほっとした。悪意が無いにしろ、人の視線というのは疲れるものだ。
それにしても。
「これとか美味そうだなあ」
メニューを開いて見せる霊幻さんに舌打ちしてしまう。こんな安い店を選んで、舐められているのだろうか。
「好きなもの頼めばいいじゃないですか、安いんですし。ワインだけでもロマネにでもします？」
「律くん〜、金銭感覚おかしくなってるぞ……良くないなぁ、そういうの」
「……そんなに稼ぎが無いと思われたのが心外だっただけです。兄

さんとは新宿の××行ったんでしょう？」
「ぶっ！？そんなこと話してるのかモブのやつ！？！？」
「最近はあなたの話ばかりですよ。どこそこに行ったとか、何食べたとか、……指輪をお揃いにしたとか」
霊幻さんがびっしり冷や汗をかき始めたので、満足することにしよう。
「ほら、オーダーしないと来ませんよ」
霊幻さんの手からメニューを奪って店員を呼ぶボタンを押す。
ガチャ、と部屋のドアを開けて店員が入ってきた。
「……と、……と、……と、バドワイザーを。こちらにはモクテルをお勧めで」
「モクテル？」
「ノンアルコールのカクテル……です……」
しまっっった！！くそっ、気をつけてたのに食らった！！疑問に小首を傾げる霊幻さん。その指が薄い唇を歪ませていて。
あーもう！！そういうの食らわないようにしてたのに！！死ねモクテル！！
「……大丈夫か律くん？すみません、以上で」
「なるほど……この店はあなたの罠だったわけですね……」
「いやほんと何言ってんの律くん」
……ダメだ……
回復に少し時間がかかる……
……
……
「お待たせしましたー」
店員が皿を持って入ってくる。
「どうぞごゆっくりー」
伝票を置いて店員が部屋を出ていくと、霊幻さんがガチャリと部屋の鍵をかけた。
「後は誰も来ないから」
にっと笑う霊幻さんに心臓が飛び出すかと思った。
「な、な、な、何考えてるんですか！？！？」
「……いや、酔っぱらいが部屋を間違えたりするとうっとおしいか

ら……」
「言い訳ですね！？」
「何が！？ほらもう、いただきますするぞ。手を合わせてください」
「……いただきます」
「いただきます！」
もうごはんに集中できない。やられた。全部霊幻さんの術中だ。ほら見ろ、今も殻付きのエビを食べてる。ベロが唇のソースを嘗めた。ちくしょう。死ね。
「……律くん、なんかして欲しいの？」
「は？……は？はぁぁああああ！？！？」
「いや、さっきからめっちゃ見てくるから……」
「何かしてるのはあなたの方でしょう！？！？」
「いや何もしてないって……」
「やめてくださいよ！！」
「り、律くーん！？……分かった分かった、何かしてやるから」
身を乗り出した霊幻さんがぱか、と口を開けて赤い舌を出してくる。
「え」
「ゆび、入れてみ？」
喉が鳴る。
「性的ですか？コレ。キスでもしてくるのかと思いました」
ほっとしながらも、心臓は跳ねっぱなしだ。くそっ、情けない。
震える手を伸ばし、人差し指と中指をぬらぬら光る舌の上にのせる。
くちゅ……
「……っ」
尾てい骨まで痺れが走った。ちくしょう、やりやがったな、この売女め。
赤い舌がぬるぬると僕の指を愛撫する。白と赤がいやらしく混じり合って。
ぴちゃ……ぬちゅ……
「ん……ふ、……っ」

細められた霊幻さんの瞳に背筋がゾクゾクする。
「んぁ……っ」
指が変なところに当たったのか、霊幻さんがエロい声を出したので慌てて引き抜いた。
「……さ、メシ食おーぜ」
口元をナフキンでぬぐって、何事も無かったかのように食事を再開する霊幻さん。
「……こんなこと、いつもするんですか？」
僕も指をおしぼりで拭きながら訊く。
「んー？」
ぐさり、と霊幻さんのフォークがソーセージを刺す。
「するよ」
がぶりと噛みちぎられて、咀嚼されるソーセージが、妙に穢らわしく見える。
僕はどうにも股間の収まりが悪くて気が散っていたが、なんとか食事を詰め込んだ。

※※※※※

「じゃあ、ホテルだけど……」
僕は乾いた喉に無理矢理空気を飲み込む。
「あの」
「うん？」
「霊幻さんのマンションがいいです」
ひゅ、と霊幻さんが息を呑む。
霊幻さんのマンションということは。
エクボと、住んでるマンション、ということだ。
「霊幻さん、影山先生の要求なんで……っ」
マサが祈るような声を絞り出す。
「たのんます……っ」
「……分かった。マサさん、マンションにクルマをまわしてくれ」
携帯を取り出してエクボに連絡しようとした霊幻さんを止める。
どうせなら鉢合わせた方が面白い。

マンションについて、エレベーターで目的の階数まで上がる。
青い顔をしている霊幻さんが面白くて、壁に押しつけてキスしようとする。
「……っ、マンションの住民に見られると、マズいからっ……」
「ダンナがいるのに、若い男を連れ込んだ、って？」
構わず唇を奪う。最高に気分が良い。
「ほら、早く開けてくださいよ」
「……っ」
かちゃ、と鍵を開ける霊幻さん。
「んー？おかえりー。今日はキャンセルだったのか……って……」
手をタオルで拭きながら出迎えにきたエクボが、僕を見て顔を歪める。
「……なるほどな。いい趣味してやがる」
「エクボ……」
「気にすんな。俺様適当に外で時間潰してくるわ」
霊幻さんの頭を撫でようとしたエクボの手をパシっと跳ね除ける。
「触るな。今は僕のだ」
「今だけ、な」
ムッとしたエクボから霊幻さんの腰を自分の方に抱き寄せる。
「……アンタの奥さん、具合いいんだってね？」
「……ッ！」
ぶわっと霊幻さんが赤くなる。
びきり、とエクボの額に青筋が浮かんだのが見えた。
「……おー、最高級品だ。良かったな、貸してもらえて」
……ムカつくやつだ。
大人しくエクボが出て行って、霊幻さんがあからさまにほっとする。
僕も肩透かしだった。殴られぐらいはするかと思ったのに。つまらないな。
「案外愛されて無いんですね、霊幻さん」
「……っ」
「馬鹿な人だなぁ。エクボなんか選ぶから」
傷付いて震える霊幻さんはすごく可愛い。僕は優しく何度も髪にキ

スをしてあげた。
「へえ！こういうの本当に買う人いるんだ」
キッチンに入るとペアのマグカップを見つけた。取っ手がハートになるやつだ。
「……いいだろ、別に……」
「いいえ、ダメです。調子に乗っててムカつくので」
僕はマグカップの緑の方をゴミ箱に投げ込んだ。
「これも、これも、ムカつく」
ペアグラス、二枚セットの皿、夫婦茶碗。
そのどれもがゴミ箱の中で修復不可能なほど粉々になっていく。超能力で粉砕してるんだから当然だ。
「あ……あ……」
霊幻さんの目に涙が溜まってきた。いい感じだ。
場所を移動してリビングルームに飾られている２人の写真に目をつける。
すいっ、と写真立てから写真を取り出して。
「やめ……！」
びりびりに破いてワザと飾り棚に残して置いた。
「律くん、なんでこんなことすんだよ！もういいだろ、はやくベッドに……」
僕に抱きついて止めようとしてきた霊幻さんを、冷たく見下ろす。
「霊幻さん」
薄く笑うと、びくりと霊幻さんが怯えるようにはねた。
「指輪、何処に隠しているんですか？」
さーっと霊幻さんの顔が青くなる。
「ここかな？」
リビングの引き出しを漁る。
「それとも、ここ？」
寝室のベッドサイドを漁る。
……無い。ああそうか。
「いつも持ち歩いてるんですね？」
楽しくて楽しくてたまらない。
思わず逃げようとした霊幻さんを捕まえて、身体中をまさぐる。

「やめっ……やめてくれっ、律くん……っ」
「……みいつけた」
ジャケットの内ポケットにそっとしまってあった指輪を取り出して、
「あああああああ！」
ぐじゃ、と金属の塊に変えてやった。
「ひどい……」
とうとうへたり込んでしくしく泣き出した霊幻さんの腕を引っ張り、ベッドへ誘導する。
「人並みに幸せになんてなろうとするからそうなるんですよ。人に言えない仕事ばっかりしてきたくせに」
呆然と泣く霊幻さんをベッドに座らせ、僕はキッチンからビールを取ってくる。
ぱしゅ、と蓋を開けて。
一口僕が呑む。
「ほら、霊幻さんも」
「……ありが」
受け取ろうとした手をスルーして、頭の上からびしゃびしゃとビールをかけた。
「え……っ」
濡れた髪と、肌に張り付いたシャツが色っぽい。
霊幻さんとビール、合うなぁ。
「……貰えると思ったんですか？浅ましいなあ。ほら、スラックス脱いで、脚開いて」
ビールの空缶を適当にその辺に投げ捨てて、僕もスラックスと下着を脱ぎ捨てる。
「コンドームどこです」
「……」
霊幻さんは無言でスーツのポケットからコンドームの箱を取り出す。
「へぇ、いつでもヤれるように持ち歩いてるんですか」
「……」
「違うか。いつでもヤられてもいいように、だな。貴方の場合」

「……！」
燃えるような瞳で睨まれて、ゾクゾクした。その溶けた太陽みたいな瞳にもっと見られたい……！
「もう準備してあるんですか？『いつでもヤってください』って感じですね、はしたないなぁ」
霊幻さんのアナルに指を突っ込むと、中からトロリとローションが垂れてくる。
「ぁっ」
霊幻さんの反応を見逃さない。
「……気持ちいいんですか？」
「ち、ちがうっ……ちょっと、びっくりして……っああ！」
指を２本に増やしてばらばらと動かすと、霊幻さんの腰が跳ねた。
「こんな気持ちいいことしてもらえて、お金も貰えるなんて、いい仕事ですねぇ、霊幻さん？まともに働くのが馬鹿らしくなるでしょう」
「んっ……んんっ、そ、んな、こと……」
「あんなクソみたいな量の勉強をして、夜中まで働いて、それでやっと稼げる額を、アンタはセックスするだけで貰ってる。いいご身分ですねぇ」
「……おれ、ウリ辞めたいんだけど」
ふるえる。それは困る、という思考が上がってきて、理由が分からなくて混乱する。
「……っ、今更、綺麗な身体にでも戻れるとでも思ってるんですか！？」
「いや思ってねーよ。なーもうさぁ、萎えることばっか言うならおしまいにすっか？」
「え……っ」
「さっきから聞いてりゃチンポおっ勃てながらクソ寒い説教ばっかしやがって。いーんだぜ俺は、今ここでキャンセルしてもらっても！」
「あ…その…」
「娼婦なら何してもいいとでも思ったか？おあいにく様、これでも生きてる人間なんでな！」

「れ、霊幻さん……」
「さぁ、帰った帰った！」
怒った霊幻さんに思考がフリーズする。
そこで生まれて初めて僕はこの人に怒られたのだと気が付いて呆然とした。
僕は、この人が、怒らないとでも思っていたのだろうか。
「……律くん。ヤリたいんだろ、お前」
「えっ！？はぁっ！？！？」
「もう素直になれよ。ヤリたくてヤリたくて仕方ないんだろ。だから俺が所属してたヤクザの顧問弁護士にまでなったし、ケツモチのマサくんまで探し出した。……ほとんどお前の仕業だろ、アレ」
「なっ……！」
「そこまでして、俺とヤる方法を導き出した。……ホント俺のこと好きだよな、律くん」
心臓が止まるかと思った。
「もうさー、建前は抜きにして俺とのデートを楽しめよ、お前。２００万も払ってるんだからさ」
霊幻さんがビールまみれのスーツやシャツを脱ぎ捨てる。
「ほら、触りたかったんだろ」
「そのエクボの手垢だらけの身体をですか？」
「……律くん、エクボって言うの禁止な。……自分で傷付きに行ってどうするんだよ」
「な……」
「嫌なんだろ？俺がエクボと結婚してるの」
「……間違ってるとは思ってます。あなたは兄さんを選ぶべきだった」
「違うよ。律くん、自分にあんまりにも上手に嘘をつく癖ばかりつけてきただろ。律くん、君はな、好きな人をエクボに取られて、悲しいんだよ。ただそれだけだ」
「違……」
「でもな、律くん。今は違う。今、この時間は、俺は君のものだ。……律くんの、霊幻さんだ」
ぐわんと視界が揺れる。

やめろ。
やめてくれ。
「あなたって人は……兄さんをあんな風にたぶらかしておいて、僕まで同じ目に合わせようと、してるんですか……？」
すうっ、と妖しく。
霊幻さんの目と口が細められる。
「そうだけど……？」
ごくりと喉が鳴る。最高に幸せで気持ちいい。そんな風に兄さんは言っていた。
「場所変えるか？いつもこのベッドで俺が抱かれてるって思うと傷付くだろ」
「いえ……興奮するんで、場所はこのままで」
これは、この人が誘うから。
「は、ぁ……っ」
霊幻さんの身体をかき抱き、思いっきり深呼吸する。霊幻さんの汗臭さに、ビールの匂いが混ざって、ずるい。
「霊幻さん……」
「……うん」

ずっとこうしたかった。

僕の腕の中で、僕を見て、僕も見つめ返して、肌を合わせて。
「……あと、つけちゃ、ダメだからな？」
ちゅ、ちゅ、と肌にキスをし始めた僕に霊幻さんが注意してくる。
「……わあってまふよ」
腹いせのようにギリっと強めに乳首をねじってやる。
「あ、ひ！？」
優しく僕の髪を撫でていた手が離れた。
「……乳首弱いんですか？」
「何故だろう、それを言うことは危険だと俺の本能が告げている」
「……乳首弱いんですね」

ぺろ。
「っあん」
ちゅぱ、ぺろぺろ、こりこり、ぐにぐにぐに。
「あっ、ちょっ、りつくぅんっ」
僕を呼ぶ声が上ずってびっくりした。
その瞬間この人がイったからだ。
「えっ……乳首でイけるんですか貴方……どれだけ淫乱」
「律くん……好きな人をその手でイかせた感想はどう？」
ぐわ、と血液が沸騰しそうになる。
「〜〜〜っ、もっと、イかせたい……」
「そう……じゃあ、挿れて？俺ね、」

チンポでイかされるのが１番好き。

そう耳元で囁かれて、焦るように挿入の体制になる。
えっ……と、コレで入るのかな……。
「もう少し下。ぐっ、と思い切って腰入れてみろ」
言われるまま、膝の裏を押さえる手に力を込めて腰をすすめる。
ぐにゅん、と。
霊幻さんのナカに入った。
「挿入った……！」
「童貞卒業おめでとう、律くん」
にやっと霊幻さんに笑われて、真っ赤になったのが自分で分かった。
「俺のためにとっててくれたんだろ、童貞。貰えて嬉しいよ」
「な、なんで、バレて……」
「んー、なんとなく？いいじゃん、好きな人で童貞捨てれたんだからさ」
ぽろ、と涙がこぼれる。
相談所で見ていた大きな背中が、華奢に見えた日のことを思い出していた。
床に溢れたお茶を雑巾で拭くこの人の髪がふさふさ揺れていて。
白いうなじに汗が垂れていて。

──今、事務所には誰もいない。このままこの人に襲い掛かって、超能力で抵抗も封じてしまえば、今ならこの人を×××。
そう思ってしまった自分に吐き気がして、すぐそう思った自分の思い出ごと気の迷いだとそう封印した。
でもその後に兄さんから霊幻さんのことを好きになったと聞かされて、僕は狼狽えてしまった。だって詐欺師でうさんくさいあの人は兄さんにはふさわしくない。
（それに、僕が先に×××××××××）
でも。ずっと霊幻さんのそばにいた兄さんは、霊幻さんの良さを僕よりずっと知っていた。兄さんが霊幻さんを好きになるのはとても自然なことで。ああ。僕は、兄さんと霊幻さんが引っ付くのが自然だと思って、応援することにした。それが正しいと思ったから。
ある時、ライバルが出来ちゃった、って兄さんが芹沢さんの事を言った時のことも、よく覚えてる。
芹沢さんも、ずっと霊幻さんのことを事務所でみてきたから。
あの真面目で優しい人は、霊幻さんにはもったいない気がするけど。兄さんは「ちゃんと師匠のことを大事にしてくれる人が相談所にいるのは安心する」と言っていた。
（僕は霊幻さんの側にずっと芹沢さんがいるのは××××）
そんな時だった。裏メニューのことをネットで見たのは。くだらない作り話だと思いながら、僕は何度も、売春をしている霊幻さんの妄想で×××××。
そして。
霊幻さんのことを、好きでも何でも無いくせに。
色んな人の気持ちを踏みにじって、エクボは霊幻さんをさっさと抱いて、その気持ちを持って行った。
大人は汚い。
だって。
「ほんとは僕が１番最初に好きになったんだ……」
ポタポタと霊幻さんのお腹の上に涙を落とす。
「……頭のいい子は成熟も早いからなぁ」
霊幻さんが物憂げに僕の涙をぬぐう。
「……俺、今、律くんが好きだよ」

すり、と僕が入ったままのおなかをさすりながら霊幻さんが言った。
「リップサービスよしてくれます？」
「嬉しいくせに。好き。好きだよ、律くん。愛してる……ッ」
残酷な口を唇で塞いだ。つもりだった。
やられた。なにこれ。
……気持ちいい。
僕は甘ったるい何かがしこまれた霊幻さんの口腔内を蹂躙するのを辞められない。
ぐちゅぐちゅ……ぬちゅ、くちゃっ……
「ん……」
腰が情けなく揺れると、ぐちゃっと不快感がする。いつのまにか出してたみたいだ。
「ゴム、新しいのに替えるな」
生でしてもいいのかな……
「あの、口で付けてくれませんか」
「ん？いいぞ」
髪をかき上げて、口に咥えたゴムをするすると見せつけながらハメてくれる霊幻さん。
……フェラして欲しいな……
「あ、ぁー……っ」
挿入すると、ぴゅるりと精液をこぼす霊幻さんにびっくりする。
「イったんですか？今ので？」
「ぅ、ん……っ、きもちいいから、いっぱい、動いて……？」
よかった。
霊幻さん、僕のちんこで、イけるんだ。
良かった……。
「あっ、ぁ！あぁぁっ、は、ぁっ、」
腰をぐちゅぐちゅ振っていると射精感がすぐ上がってくる。
気持ちいいけど、つまらないな。
「……終わりたく無い……」
「……っん？それなら、休憩挟みながらヤるか？」
「は？」

「出なくなるまでやったら、勃ちそうになるまで、コーヒーでも飲んで過ごして、勃ったらヤる」
「そ、そんな退廃的な……」
「んぁっ！ちょ、奥……っん、もう、こんなこと、してるのに？」
蠱惑的に笑う好きな人を組み敷いて腰を振る自分のことを、僕はどうしても、客観視できない。
「うっ……」
びゅーびゅーと射精するのが気持ちいい。
もっとイきたいな……。
気だるく精液の溜まったコンドームを外す。
ふと、思いついて。
ぐしゃぐしゃにした指輪をコンドームの中の精液に沈める。
そのままゴムの口を縛って、ゴミ箱に捨てた。
「……律くんってめちゃくちゃ嫉妬深いよな」
「そうですかね……男なんてこんなもんじゃないですかね……みんな我慢してるだけだと思いますよ」
うとうとしてきた。でもセックスはしたい……。
「世界トップクラスの超能力者が……揃った場所で、ネトラレました宣言なんかして……恋人を一瞬で除霊されなかったの、ただの温情ですから、ね……」
ああ、ゴム、めんどくさいな……
……。

「あれ？起きたのか、律くん」
「霊幻さん、セックスしたいです」
「ん、分かった。っあ！？ちょ、そんな、いきなり、はげし……っ」
「霊幻さん、好きです、大好き」
「ああっ！ぅんっ、俺も、俺も好きぃっ」
「霊幻さん、俺を、俺を選んで」
「イ……っ！り、りつくん？俺、今ちょっと結構深くイッたから、

待って欲し……っぁぁああ！」
「兄さんじゃなくて、俺を、選んで」
「り、りつくんは、りつくんだろ……？俺は、りつくんが、好きだよ……」
「……ぐう」
「出しながら寝ちゃったの！？もー、仕方ないな……」

※※※※※

で。
なんだこの惨状は。
朝になったので帰ってきてみれば、部屋の中はぐちゃぐちゃだし、きったねえベッドの上で律はこの上なく幸せそうに寝たまま起きないし、マサは泣きそうな顔で叫んでるし、霊幻は必死で律を起こそうと揺さぶっている。
「なんだなんだ。とうとう腹上死させたのか、霊幻？」
「縁起でもねぇこと言うなよ！昨日仕事あるからって５時にはセックスやめたのに、律がどうやっても起きねえんだよ」
「組のお偉いさん方との打ち合わせにあと１時間も無いのに……っ影山せんせーっ！！」
「……ちょっと見せてみろ」
まぶたをこじ開けて律の目を覗き込む。
「んん？……変な自己催眠？つーかプロテクトみたいなのが超能力でかかってんな。仕方ねぇな、とりあえず軽い催眠ぶつけて起こしてやるわ。自己防衛反応おこすだろ」
じわりと律の目に向かって霊力をぶつける。
と、びくん、と痙攣して律が目覚めた。
「……はぁ！？なんでマサとエクボが……」
「あのよぉ、終われば時間までには掃除して退去してんのがせめてものマナーじゃねぇか？」
「何を、言っ……」
「律！会議まで！１時間無い！！」
言い争いをしようとした俺たちを遮って霊幻が叫ぶ。

「……えええっ！？僕、そんなに寝て……」
「いいから！シャワー浴びて！着替え！！」
「……っ！」
律が風呂場に飛んでいく。
ものの数分もせず飛び出てきて、おそらく霊幻がかけたであろうハンガーからスーツを引ったくるように着る。
「起きられないなんて、こんなこと初めてだ……！マサ、飛ばして！」
バタバタと２人が出て行く。
静まり返った室内で。
「……行ったか？」
「行ったと思う」
「じゃ、業者待たしてあるから呼ぶわな」
俺様は『スタジオクリーニングサービス』と書かれたジャンパーを着た男たちを呼びに行った。
数週間前。
俺様は、念のためＡＶ撮影用のスタジオをマサに言って借りて、しばらく霊幻とそこで暮らすことにした。霊幻は考えすぎだと言っていたが、アイツは本当に甘い。考えが甘すぎる。人の善性ばかり信じるんじゃねぇ。ヤクザに乗り込んで霊幻にもう一回ウリさせるまで追い込んできた執念深い奴らだぞ？嫉妬のレベルも桁違いだわ。
「ん？そういやダミーの指輪どうした？」
「いやその……ははは。まあいいじゃん」
「……ほーう？」
面白そうな匂いがする。
俺様はまっすぐ寝室のゴミ箱に向かって、中身をゴミ袋の中にぶちまけた。
「ギャハハハハハ！！」
『ソレ』を見つけて、腹抱えて笑ってしまった。
「やるなぁ〜、りっちゃん……くくく、ほんといい趣味してるわ」
俺様は笑いながらそのコンドームをポイっとゴミ袋に戻し、スーツの内ポケットからジャラジャラとダミーの指輪が入ったジップロックを取り出す。

「な？指輪付けてなくても狙われただろ？しばらくはダミー持ち歩いとけよ」
霊幻は大人しくダミーを指にはめる。
「今回は助かった」
「んー？」
指輪を眺めながら霊幻が俺様に寄りかかってくる。
「これ、もし本物がやられてたら……俺、立ち直れなかったかもしれない」
くしゃ、と柔らかい髪をかき混ぜてやる。
「案外お前はもろいからなぁ。安心しろ、ちゃぁーんと俺様が守ってやるよ」
「……うん……」
「それにしても……」
「エクボ？」
「あ、いや……」
律に掛かってた強固な催眠みたいなもの……いや違うな、あれはやっぱりどちらかというとプロテクトだ。あれはなんだ？
……セックスでプロテクト？
「なあ霊幻。お前、律に何したんだ？」
「……いや別に何も？」
お前ならそう応えると思ってたよ。
ま、律も立派な大人だ。
ちゃんと自分で解決するだろ。

だが。

「れーげんさん、すき、すきですっ、もっとぼくをほめて」
「り、りつっ！しっかりしろ、せめて予約を取って……俺の話を……えくぼ〜！」

意識のトんでる律に霊幻が玄関で襲われてて、俺様は律を蹴り飛ばした。

「何しやがるこのクソガキ……ん？」
律がピクリともしない。……そんなに強くは蹴ってねぇぞ？
ビクン、と手が動いて、律が覚醒する。
「僕は……なぜここへ……！？」
「オイ律、まさかとは思うが……霊幻を襲ってた間の、記憶がねぇのか？」
顔を真っ赤にして頷く律。
「俺はまた、そんなことを……」
「『また』？」
「……最近、霊幻さんを買った後、話しがおかしい時があって。たまに霊幻さんが言ってる回数と俺が覚えてる回数が違うんです。
で、どうも、寝てる時に無意識にやってるっぽいな、ってのは薄々感じてて……」
「ははあ。……律ぅ、お前、理性にプロテクトかけただろ」
「……はあ！？」
「霊幻と過ごしてる時、『可愛いいな〜』とか『エロいな』とか『触りてぇな』とか『ヤりたいな』とか、そういう感情、全部封じ込めて過ごしてるだろ、お前」
「……だとしたら、何」
「セックスして、その辺の歪みが出ちまったんだよ。セックスってのはそういうのを全部ぶちまける行為だ。でも理性が邪魔してできない。やったらもっと気持ちいいのは分かってるのに……じゃあ邪魔な理性の方に、眠っててもらおう、って思っちまったんだよ、お前は」
「え……っ」
「ま、無意識だろうがな。それが超能力者の厄介なところだよ。……なあ、認めちまえよ、律。お前は霊幻が可愛いくて大好きで仕方なくて、セックスしたいあまり仕事を放り出してダンナがいるかもしれない家まで乗り込んできちまうイカれ野郎だってことをよ」
「〜〜〜っ、認められるわけないだろ！？」
「だったら精神科でも行っとけ。『セックス中毒なんです』とか言っとけば、性欲が減退する薬とか、睡眠薬とか処方して貰えっか

ら」
セックス中毒、という言葉に律だけでなく霊幻までショックを受けてるのが分かる。
あー、また余計な責任感じてるんだろーな、こいつは……。
「……分かった。そうする。……すみません、ご迷惑おかけしました。……本当に」
よろよろと律が玄関から出て行く。
「……大丈夫かな、律くん」
服を直しながら霊幻が呟く。
「さぁーな。社会的信用を失うような場面でお前を襲うようになるまで秒読みじゃねーの？」
「……エクボ」
すがるように霊幻が俺様を見上げてくる。
「………………はぁー……なんとかするよ、そうしてやればいいんだろ」
「……ありがとう」
フワフワと笑う霊幻。笑えばいいと思いやがって。正解だよチクショウ。

「……芹沢のツテを頼るか」
日本の自衛隊の超能力研究の歴史は長い。その中で蓄積されてきたデータが１番今の律に役立つはずだ。

今、芹沢は、そういう部隊の特別顧問として働いていた。

続